

【事例紹介】

海外大学での事務職員研修報告

-オウル総合科学大学を訪ねて-

Report on Staff Training at the University Abroad:
Visiting Oulu University of Applied Sciences

北海道科学大学学務部教務第一課教務係長 石黒 祐介

ISHIGURO Yusuke

(Student Affairs Division, Hokkaido University of Science)

学校法人北海道科学大学経営企画室経営企画課主事 沼田 優子

NUMATA Yuko

(Management Planning Department, Hokkaido University of Science)

キーワード：海外研修、フィンランド、FD・SD

はじめに

学校法人北海道科学大学は1924年に設立された自動車運転技能教授所から始まり、その後学校法人に組織変更し、短大・高校の設置に続き、1967年に本学の前身である北海道工業大学を開学した。当初は工学部だけの単科大学であったが、学科増設・医療系学部の設置等を経て、2014年に3学部12学科体制の実学系総合大学となり、校名を「北海道科学大学」に変更して新たなスタートを切った。2017年に開学50周年を迎え、2018年には系列の北海道薬科大学との統合を計画するなど、さらなる改革を進めているところである。

本学では、職員の能力開発を大学改革に必須となる重要なSDと捉え、いくつかの研修制度を設けている。その一つとして、公募による学外研修を一昨年からは開始した。他大学との情報交換や、研修会等への参加を自ら企画するもので、訪問先の選定・アポ取りから全て一人で行い、研修後は全員の前で報告することとなるため、慣れていない職員にとっては大変な研修となる。その苦勞を乗り越え、国内外の先進的な取り組みを勉強してきた職員は大きく成長し、それぞれの職場で中心となって活躍している。

今回は、国際交流がテーマであることから、採択された研修の中でも国外の大学訪問を企画した職員、学校法人北海道科学大学経営企画室経営企画課沼田優子主事の研修を以下に報告したい。

研修報告

1. オウル総合科学大学への研修準備

平成27年度から本学においてスタートした事務職員の公募による学外研修制度を利用し、オウル総合科学大学 Kotkantie キャンパス（以下 OUAS）において、平成27年10月12日から16日まで5日間の事務職員研修をおこなった。

研修先として OUAS を選んだ第一の理由は、協定大学として短期の交換留学をおこなっていたことから、学生のみならず職員同士が交流をすることは互いの関係を強化するために非常に意味のあるものと考えたためである。

第二に、OUAS では、質保証について、あらゆる取組においてよい結果を生み出すために全教職員、学生、ステークホルダーがワーキンググループに参加しフィードバックをおこない、活動のベースとして組織的な PDCA サイクルを実施している¹と大学 HP に明記されており、今日の私立大学は教育の質の保証、地域社会や企業への貢献や国際化といった側面において、さらに効果的で積極的な役割を担う努力をおこなうように要請されていることから、実際にどのように PDCA サイクルが運用されているかを学びたいと思ったためである。

また今後の国際交流業務における学生サービスの向上に役立つ情報を得るため、ちょうど短期留学中であった本学学生と平成27年度の OUAS の交換留学生に、それぞれ留学中の学生生活についてインタビューをおこなった。

研修内容のアレンジメントについては、国際課コーディネーターの Bastian Fähnrich 氏とメールでやり取りをおこなった。まず初めに研修志望動機書、履歴書と希望している研修内容を伝え、それを基に Fähnrich 氏に研修プログラムを作成していただいた。当初は施設見学や各課の業務内容についての意見交換等を希望していたが、これに加え留学生向けの異文化理解授業の見学も提案していただくなど、より充実したプログラムを短期間で作成していただいた。とてもスムーズな対応だったため驚いていたのだが、今回の研修はエラスムス・プラス²のスタッフトレーニングフレームワークに基づいておこなわれているとのことであった。留学経験もなく英文での志望動機書、履歴書の作成や業務上のアポイント取りは初めての経験であったが、本学語学系教員や Fähnrich 氏にサポートをしていただき問題なく準備が完了した。その他、本学の基本情報や各課に質問したい事項をまとめ、研修に臨んだ。

¹ OUAS ウェブサイト、<http://www.oamk.fi/en/about-oulu-and-ouas/how-ouas-works/laatutyo/>

² Erasmus+ : 2014年～2020年にかけて、最大500万人が他国での学習及び職業訓練／職業教育を受けられるようにするための助成金プログラム。現在欧州委員会が実施している、生涯学習や青少年部門での様々な助成金プログラムを統合し、より統一性と透明性を持たせることが狙いである。流動性（モビリティ）、教育とビジネスの協働、政策改革への支援の3つを主要アクションの柱とする。
出典：大学改革支援・学位授与機構、http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/block2/1191501_1952.html
(参考) Erasmus+、http://ec.europa.eu/programmes/erasmus-plus/node_en

研修では、国際課、学事課、入試課、人事課、教務課、学生課の業務についてマンツーマンで説明していただいたが、今回は特に興味深かった内容として「教育の質の保証」と「異文化理解」について報告したい。

2. オウル総合科学大学概要

OUAS Kotkantie キャンパスはボスニア湾に面したフィンランド北部の中規模都市オウル市に位置している。ICT、Technology and Natural Resources、Media and Performing Arts、Oamk LABS といった工学系学問分野を有しており、そのほかに英語による交換留学プログラムを実施している。学生数は約 4,000 名、教職員数は約 200 名である。

フィンランドの高等教育システムは日本と異なり、University と University of Applied Sciences（応用科学大学、いわゆるポリテクニク）の二つから構成される。

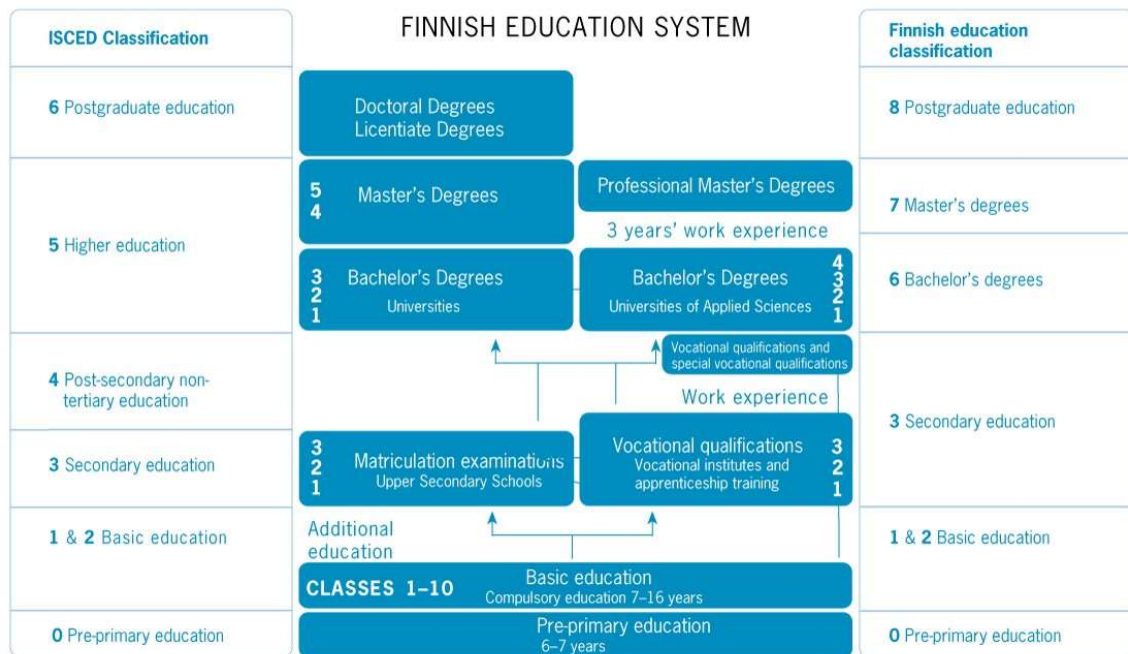


図 1 : FINNISH EDUCATION SYSTEM

(A GUIDE FOR INTERNATIONAL EXCHANGE STUDENTS 2015-2016 より抜粋)

OUAS は実学に基づくポリテクニクであり、職業生活における専門性を高め発展させていくことに重点をおいた教育を行っている。単位制度は ECTS (European Credit Transfer and Accumulation System) を採用している。ECTS とは、大学間の単位互換や学習成果の測定のために作られた単位評価システムであり、ECTS の評価基準を自大学の評価基準を対応させることで EU 内の他大学との単位の読み替えが容易にできるシステムとなっている。

3. 教育の質の保証

(大学評価活動)

学事課において Marianne Isola 氏より教育の質の保証とその評価方法についての説明を受けた。フィンランドでは日本と同様に、外部監査(教育の質の保証に関する認証評価)がある。6年ごとに Finnish Education Evaluation Centre (FINEEC) による認証評価を受審する必要がある、チェック項目は大学運営、質の保証システム、教育課程の内容等全6項目あり、適合しない場合は2年後に再度評価を受審するシステムになっている。また自己点検評価も2年ごとにおこなっており、2~3名で構成される評価グループを置き、教育課程や教育の質について毎回チェックテーマを変えて実施し、評価結果は広く学内に公表しているとのことであった。

学部単位の活動としては、定期的に教員による他大学の視察や、共同研究をおこなっている企業を対象に調査を実施し、共同研究や学生のインターンシップのフィードバックを得るようにしていた。

また、学生も参加可能な評価活動としては、学生アンケートを学期末に実施しており、学生はパソコン上で授業アンケートや自己評価、その他学生生活の要望意見を回答することができ、結果はイントラネット上で開示される。アンケートに積極的に回答するように学生団体がパンを配って(研修当時の OUAS では、PDCA サイクルをパン作り、それによって生まれた成果をパンに例えていた) 広報活動をしているとのことであった。更に年に一度オープンフィードバックイベントと題し、教員と学生が自由参加で授業内容の改善について話し合う機会を設けており、ディスカッションの結果は各学部が開示される。その他学部単位でおこなっている様々な調査活動を将来的に一本化したいとのことであった。

(カリキュラムディベロップメント)

続いて学事課において、エデュケーションプランナーの Johanna Huttunen 氏に OUAS でのカリキュラムディベロップメントについて教えていただいた。カリキュラムガイドラインは EQF³、NQF⁴と大学の教育方針を基に作成し、カリキュラムディベロップメントの活動のプロセスは、学科教員が「職業生活に必要な能力の設定」をし、「その能力を達成できる授業内容となっているかのチェック」をおこ

³ European Qualification Framework:

各国の各資格が、どのレベルにあり、当該資格保有者がどのような知識、技能、職業能力、個人としての能力(コンピテンシー)を持つか、比較可能とする。学習成果を8レベルで定義している。

出典: 文部科学省、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/07121811/004/001.htm

⁴ National Qualification Framework:

欧州は各国において国家資格フレームワークを採用しており、フィンランドにおいても学習成果をEQFと同様に8レベルで定義している。

出典: European Centre for the Development of Vocational Training、<http://www.cedefop.europa.eu/en/events-and-projects/projects/national-qualifications-framework-nqf>

ない、「次年度に向け改善すべき点を探す」サイクルで実施しているとのことだった。

日本の大学の教育課程表やシラバスと同様に、配当年次、単位数、授業の構成、獲得できる能力、授業内容を大学HPで公開している。学習評価はルーブリック評価を使用しており、まず科目のレベルを達成目標別に3段階で設定しており、評価項目を「専門知識と情報探索」「専門技術と職場における活動」「グループワークスキルとリーダーシップ」「責任能力」の4つに分類し、学生の目標達成レベルをそれぞれ3段階で評価している。Level 1は「define, describe」、Level 2は「apply, change」、Level 3は「categorize, combine」等を使用し、各レベルによって修得できる能力を統一して設定していた。教員にとっては評価基準を明確化することで授業計画を立てやすくなり、また学生にとっては授業の目的を理解しやすいといったメリットがある。

事務作業はペーパーレス化が進んでおり、実際のカリキュラム作成作業は専用のシステムを使用しておこなっていた。達成目標はマトリックス表のチェックボックスにチェックを入れるだけで簡単に一覧表として作成できるなど、効率よく作業ができるようにデザインされていた。カリキュラムは学科で作成したものを事務方でチェックし、最終的には学長がすべての内容を確認する。

今後のカリキュラムディベロップメントの目標としては、夏休み期間を利用したサマースクールや修士課程の通信コースの開設を目指しているとのことであった。

4. 異文化理解

(学生の異文化理解を促す)

各課での情報交換に加え、留学生向けの異文化理解授業 Intercultural Competency class を見学させていただいた。受講者は30名程度で、ドイツ、チェコ、フランス出身の学生が多くいた。学科教員と国際課職員が講師として授業をおこなっていた。

今回の内容はロールプレイ形式の授業で、ゲスト役の留学生が未知の島を訪れ、フィンランド人のボランティア学生が扮する島民に、歓待を受けるという設定であった。講師はゲスト役の学生には今どういう気持ちかを、またオーディエンスの学生には何が起こっていたかを尋ねる。学生達は「思いもよらない挨拶の仕方をされてびっくりした」「自分達とは違う格好をしていた」など感想を出し合うことにより、observation(事実を客観的に観察すること)と interpretation(事実を自分の価値観に当てはめて解釈すること) の違いを学んでいた。

交換留学中の本学学生も受講しており、積極的に発言をしたりグループワークに参加していた姿が印象的であった。留学生活についての近況を聞く時間を設けてもらった際、学生寮のルームメイトに英語の学習方法などアドバイスをもらえてとても勉強になっていること、様々な国の学生と積極的に交流を深めていることや、日本と外国の時間の感覚の違いに驚いたことなど、目を輝かせながら話してくれた彼の表情が忘れられない。上記の Intercultural Competency class が文化の違いを受け入

れる一助となっていたに違いない。

(スモールトーク)

実務に関する意見交換が有益だったのはもちろんのことだが、休憩中や学外でのスモールトークも自分を日本人として振り返るのに大変貴重な時間であった。フィンランドではコミュニケーションの手段としてコーヒーが不可欠とのことで、各課の職員の方は研修後必ずコーヒーブレイクに誘ってくださった。リラックスした雰囲気の仕事環境の違いや日本人とフィンランド人の共通点などについて話をすることで相互理解が深まった。

また先に紹介した異文化理解講義の講師 Marjo Heikkinen 氏にはご自宅にお招きいただき、サウナ体験や、バードウォッチングの名所であるリミンカの湿地に連れて行っていただくなどフィンランドの文化や自然に触れる機会も作っていただいた。

最も印象に残った出来事は、国際課長の Allan Perttunen 氏とディナーを一緒した際、当時問題となっていたヨーロッパへの移民の流入についてフィンランドの状況を教えていただき、恥ずかしながらこの問題についてほとんど無知であった私は「日本は island なのでなかなか状況を想像することが難しい」とお話しした時、Perttunen 氏が「日本は island というより isolated だからね」とおっしゃったことである。国際社会における日本の立ち位置や海外の社会問題に対する己の関心の低さに気づかされた瞬間であった。

5. 所感

研修期間が5日間と短かったこと、また己の英語運用能力の低さから業務説明を聞き取るのが精一杯で内容を掘り下げる質問ができなかったことが悔やまれるが、本研修の所感を下記に述べる。

(PDCA サイクルの活用)

教育の質の保証において、定期的な自己点検や学部単位のフィードバック活動、またカリキュラムディベロップメント等がPDCAサイクルに基づいて運用されている点が興味深かった。特に学生団体が授業アンケートへ回答をするよう学内で広報活動をおこなう、またオープンフィードバックイベントに学生が参加するなど、学生からのフィードバックが直接教育システムの改善につながっていることが日本の大学と異なると感じた。日本でも学生からフィードバックを得る方法として授業アンケートは広くおこなわれているが、ディスカッションという形で教員と学生がカリキュラム内容について意見交換をする例は少ないのではないだろうか。日本の学生は大学生になって初めて本格的なディスカッションをおこなうため、欧米の学生のように活発な話し合いは難しいのかもしれないが、学生がカリキュラムディベロップメントに積極的に関わることにより、教員にとって新たな気づきが生まれると共に学生は主体的に授業に参加することの意識が高まり、更なるカリキュラムの充実が図られるの

ではないだろうか。

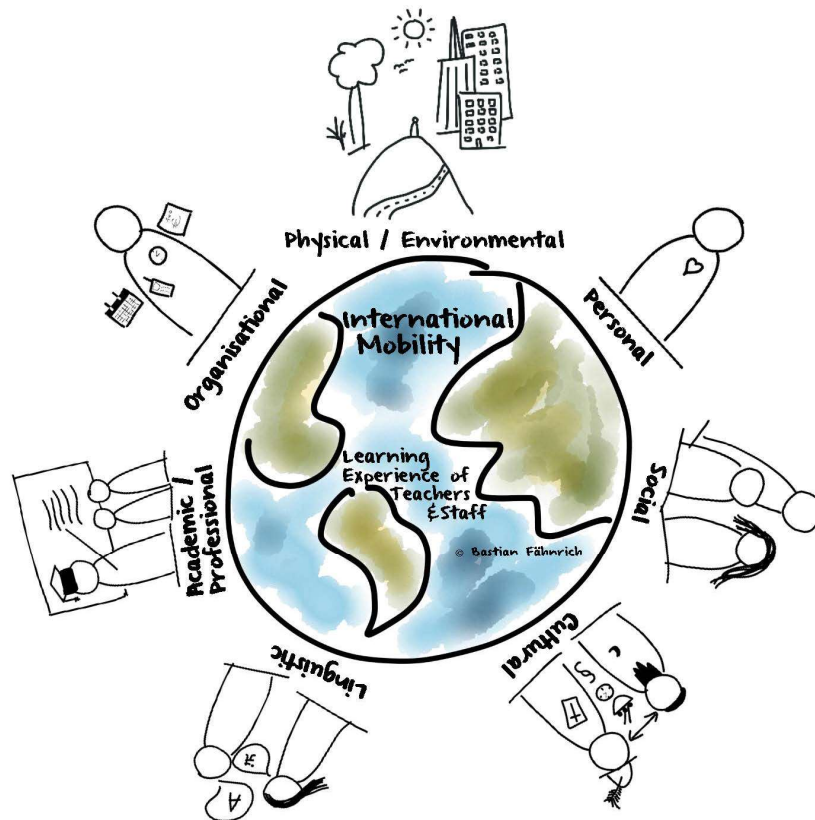
（事務職員の業務内容）

OUASの事務職員は、ルーティン業務だけではなくプランナーとして企画運營業務に携わっている点が印象的であった。人事課の方にお話を伺ったところ、新卒採用をメインとし一定の人事異動でゼネラリストを育成する日本のシステムとは異なり、職員は業務の専門的な知識経験を重視して採用しており、採用後は同じポストでスペシャリストとして業務に携わるとのことであった。職員の中には教育学、心理学の修士号を保有している方や、大学院在学中の方がいらっしゃるなど、自分の専門業務に係る学位取得が一般的であり、生涯学習が広く浸透しているフィンランドの教育環境を肌で感じる事ができた。また、国際課の事務職員が教員として異文化理解授業を担当するなど、事務職員の教育参加も本学とは異なる点であった。現在、SDによる事務職員の資質・能力の向上や意識改革と併せて教職協働の推進等、大学事務員の在り方について議論が進められているように⁵、日本においても事務職員がスペシャリストとして業務に携わることで、仕事に対するモチベーションの向上につながるのではないかと感じた。

（海外研修の重要性）

海外での研修経験は単なる実務に関する情報収集だけでなく、日本では得られない経験ができる点が重要であるため、事務職員も機会があれば積極的に海外大学での研修に参加するべきである。研修中に遭遇する事柄すべてが新しい経験であり、小さな経験の積み重ねが自信につながっていくことを実感した。英語で意思疎通を図るため、自分が言いたいことをどう相手に伝えるかを苦心することによってコミュニケーション能力の向上を図ることができ、また英文で研修レポートを提出することで語学力の向上にもつながるというメリットがある。研修用資料としてFährnich氏にいただいた資料に海外大学での職員研修のポイントがシンプルにわかりやすく説明されているのでご紹介したい。

⁵ 文科省「大学の事務職員等の在り方について（取組の方向性案）」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/015/attach/1380986.htm



International Mobility

Learning Experience of Teachers & Staff

© Bastian Fähnrich



Physical / Environmental

Learning about a foreign urban / rural / natural environment, a society and local community, higher education institution, weather and climate, accommodation, infrastructures, daily provisions etc.



Personal

Learning new things, recognising old/new features about oneself and others on a personal level. Possibility for character and personality development, (re)defining one's own identity in relation to other people.



Organisational

Learning to work efficiently by oneself and/or together with others: planning, organising and coordinating activities related to international mobility and higher education such as administration, reporting, evaluation etc.



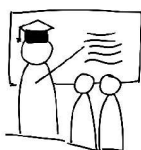
Social

Exploring new social relations. Possibility to enlarge one's professional network, meet new people, make friends from different cultures and social backgrounds: teachers, work colleagues, experts, students, administrative staff, locals etc.



Cultural

Learning about different cultures, ways of life, food, drink, customs, beliefs, values etc. Possibility to acquire theoretical knowledge about cultures and gain practical intercultural competence.



Academic / Professional

Getting to know and comparing different ways of teaching/learning, studying and/or doing work across cultures and higher education institutions. Possibility to accomplish good/best practices for own academic and professional career and development at one's own institution.



Linguistic

Communicating in English and/or other languages in everyday and campus life. Possibility to learn a new language, or improve language skills by participating in teaching and other activities and settings of the host culture and higher education institution.

図2 : International Mobility - Learning Experience of Teachers & Staff

出典 : OUAS 国際課コーディネーターの Bastian Fähnrich 氏提供資料

今回の研修を通じて、本学においても海外大学での研修派遣と海外大学事務職員の受け入れができる環境を整えることが必要であると強く感じた。大学の国際化が求められている現在、SD活動の一環として海外大学における研修プログラムを定期的を実施し、事務職員の語学力、特に異文化理解能力を高めることは必要不可欠なのではないだろうか。